

「真理は自由を得さすべし」

——福田先生を偲んで——

"Truth will surely lead you to grasp your freedom."

——To the Memory of Pro. Fukuda——

升 信夫

桐蔭横浜大学法学部

(2007年3月1日 受理)

私の研究室の書棚の上方には、一つの書が掲げられている。「真理は自由を得さすべし」とある。私が大学の教壇に立つようになった頃、修士課程での指導教授であった福田徹一先生(東大名誉教授)から賜った書である。その福田先生が、年が明けてまもなく永遠に旅立たれた。厳然として屹立している遙か彼方の存在である福田先生に対して、矮小なる私が語るべきことなどあろう筈もないが、「生涯学習について」という本号のテーマに絡めながら、心に浮かんだことなどを幾つか、記憶の区切りとして綴っておきたい。

福田先生との出会いは、70年代末に先生が法学部長に就任された頃のことであった。その頃の私はといえば、本郷に進学しながらも、将来の具体的なイメージを探しあぐね、司法試験、上級公務員試験などの目標をもって貪欲に法律の勉強に励んでいる学生達に囲まれながら、それと同化しようという気分にはなれず、誘われるままに緑会などを手伝っていた。緑会というのは、法学部長が会長を務める、法学部の教員と学生の親睦組織であり、学生自治会のない法学部にあってはその代役も果たす存在であった。その学生委員達の主な職務は、緑会雑誌という機関誌を発行すること、秋には各界で活躍している諸先輩を招いて神田の学士会館で緑会大会を開催す

ること、などであったように記憶している。委員となった私は、緑会大会の立食パーティーで、福田先生のお話を近しく伺う機会を得た。そして先生はそれを覚えておられ、後日、政治学史の講義を聴講していた私に声をかけてくださった。その時の驚きと喜びは今も鮮明である。

70年代末といえ、東西の対立が果てしなく続くともまだ思われた時代であり、ベトナム戦争はすでに終結してもカンボジアでは独裁政治や内戦のために多くの民衆が犠牲となっていた。国内では、田中金脈事件、ロッキード事件など、高度成長期の手法の綻びが目立つようになり、キャンパスに目を転じると、本郷の文学部長室が急進的な学生達に暴力的に占拠されるという事件が起きていた。60年安保からの学生達の運動は、『青春の墓標』『二十歳の原点』に窺える心象風景のように、早い段階にダイアログからモノログへと移行している。相手の理解をもはや期待しない心のあり方は、不毛なジャーゴンの投げ合いと表裏一体の関係にある。そこからのはもはや馬鹿げた暴力の応酬しか生まれて来なかった。一方で70年代末に銀杏並木を歩いていた学生の殆どは、70年安保の時にはまだ幼く、ブラウン管に映し出されるニュース映像を通じて、学生の過激な示威活動に対する否定的なイメージを植え付けられてい

る。そうした学生達にしてみれば、大学では私的なサークル活動に青春の場を見いだすしかなかったともいえよう。片や急進的な言葉と行動、他方ではそれを否定して消費文化に積極的に向かおうという流れ、そんな中で、どうやって人々がお互いを承認し、同感し、協働作業を進めることができるのかに私の関心は向けられていたように記憶している。今、手元に1978年の『緑会雑誌』がある。開くと、そうした思いが拙く書き付けられている。

その同じ緑会雑誌の巻頭に、福田先生が法学部長として言葉をよせられている。幾つか引用してみよう。

「経済的成年の条件をすべて学歴の取得に求める人々の間では、精神的成年を促すような機制は作動しにくく、ことに、世間も家族も学歴取得を無条件の善とする場合には、経済的成年と精神的成年の間におそろしいギャップがあり得るということにほかならない。」
 「わたくしは、学生諸君が自分について、機構的にはどこでも問われたことのこの問いを自ら問い、精神的成年について自問して欲しいと思う」¹

先生がこの巻頭言で学生達に伝えたかったことは、「精神的成年」ということだろう。諸法の知識を深めれば、司法試験や公務員試験に合格するかもしれないが、それだけでは高等教育を経て十分に学んだとはいえない、自己の自律した思考によって、ことの善悪を見極め、その判断に従って行動できるようでなければだめだ、という先生の思いが伝わってくる。先生がこのように説かれたのは、一つには、社会はそうした自立した成人たちの共同体であるのだから、精神的に自立していないものは社会に貢献できないばかりか害悪をもたらしかねないという、社会全体の利益に照らしての事由があり、他方では、精神的に成年となつてはじめて、人は個人として充実した生を全うすることができるという、いわばカント的な道徳哲学が背景にあつてのこ

とだと思われる。また精神的成年は、ルターの思想の重要な構成要素でもある。

私なりに現代的文脈で解釈すれば、精神的に成年であるとは、多様なシステムが併存する現代社会にあつて、一つのシステムのディスコースを無批判に他のシステムの社会関係に通用させようとするのではなく、それぞれのディスコースが異なっていることを了解しつつ、自分の立ち位置が確認できることを意味している。そしてそうあるためには、発せられた言葉の一般的な意味だけでなく、身ぶり表情などで表現されているもの、また文化として持ち物、衣服などに物的に表現されているものまでも含む、広く深いコミュニケーションが継続される必要があるように思われる。もちろんそれほど難しく考えなくとも、精神的に自立し、精神的に成年であることは、望ましいことに違いない。

但し、精神的成年という規定は、その輝かしさのちょうど裏側に、陥穽を持っているようにも思われる。それは全ての抽象化された観念が運命的に持つ落とし穴といつてもよいかもしれない。具体と抽象との関係では、具体的なものから私たちは、それらに共通する抽象の存在を探り、それに名称を与える。この場合でいえば、個々具体的な場面で、周囲が納得できる判断をその人が下せる時、精神的成年という抽象化された能力があると推定される。但し、そうであれば、個々具体的な状況が変化するときには、精神的成年として抽象化されるべき適切な判断も変化する。そしてその時、それにも拘わらず、かつての判断をそのまま維持していたのでは、その判断はもはや適切さを失ってしまう。つまり、精神的成年というのは、一度それに到達したならば、永続的にその域にあることを主張できるものではない。周囲の人との絶えざるコミュニケーションを通じながら、常に鍛えて行かねばならない精神のあり方にそれは属している。それを実体化して捉えてしまうと、例えば自転車に乗ることができる、外国語を読むことができるということのように、一度身

につけるとずっと保ち続けていられるもののように錯覚してしまう。そうした陥穽を避けるべく、絶えず広い意味での学びやコミュニケーションによって精神的に成年であろうと望むなら、それを維持してゆくことは生涯学習の重要な課題であるに違いない。

しかし、そうした精神的成年であることを目指すような生涯学習は、いま一般に広くイメージされている生涯学習とは必ずしも合致しない。様々な媒体を通じて宣伝されている生涯学習は、宅建や簿記などの資格の取得、習字やパソコンなどの実用的技術の習得、あるいは囲碁や将棋等の趣味などを対象としている。これらは、習得すべき事項が具体的なカタログとして記述することが可能であること、その事項は教え手から受取手への一方通行での伝達が可能であり、そこにはダイアログは必要とはされていないことなどの共通点を持つ。またこれらには商品としての効用が明確化しやすいという特徴もある。宅建のテストで合格点が取れるようになる、パソコンでエクセルが使えるようになる、将棋が指せるようになる、などなど、効用が明確であれば、人は金銭を支払うことにそれほど躊躇しない。

これに対して、精神的成年であり続けることは、そうした特徴を欠き、その内容をカタログとして固定化することができず、また仮にそれを身につけたとき、どのような効用があるのかを、具体的かつ一般的な形で表現することはできない。カントの批判書を読んだり、ボランティア活動を通じて、それを確実に理解し、身につけることができるというものではないし、これがあれば、一流企業に就職できるとか、よい縁談に恵まれるという保証もない。精神的に成年であるように伝授します、などという教室を開いて、広告宣伝をうっても、生徒はおそらく全く集まってこないだろう。古代ギリシアでは、多くのソフィストたちが、何か具体的なアレテー（秀逸な能力）を授けると宣伝していたのに対して、ひとりソクラテスが人間としてのアレテーを

問題としたと伝えられている。ソクラテスには、プラトンをはじめ多くの弟子が集まったが、人間としてのアレテーを授ける現代塾には、閑古鳥が鳴き続けるに違いない。

生涯教育の重要な一部となりうる精神的成熟が、市場社会の制度化された生涯教育の中では欠落しがちなのは、抽象的な観念が持つ、また別の陥穽によるのかもしれない。生涯教育という観念が人口に膾炙していなかったかつての時代、人々は日常の社会的コミュニケーションを通じて精神的成年であり続けた。だが、生涯教育という観念が一般化すると、それに対してのおおよそのイメージが確立し、さらに市場での制度化がそのイメージに具体的な内容を与え、固定化する。その過程で、その制度には馴染みにくいものは、生涯教育のカタログからは排除され、その排除の作用は人々の意識にまで及ぶ。退職して時間と費用に余裕のある団塊の世代に提供されるのは、カタログ化された資格、実用、趣味の講座であり、受け手も、そうした宣伝資料に接する機会が増すにつれて、それらこそが生涯教育なのだという認識が固定化する。

では若者達、あるいは退職する世代が、精神的成年など現状の市場社会には馴染みにくい事柄を学ぶ場は、どこに求めることができるのだろうか。あくまで個人的な努力によるのだろうか、それとも家庭や学校にその場を求めることができるのだろうか。それとも市場社会自体に、今とは違う可能性を探ることができるのだろうか。市場社会の限界と学校教育の可能性という枠を提示しつつ、学校教育こそこれが担えるのだという議論も、学校という制度に荷担しているこの身からは魅力的ではある。しかし、社会的能力の獲得プロセスと、学校という制度の限界性を考慮すると、結局、それは様々な社会的な経験を通じて獲得され、維持されると論じざるを得ないように思われる。それはまず第一に、精神的成熟などの社会的な能力の獲得については、書物などよりも、多様な人々とのコミュニケーションの機会が重要だと考えられるため

である。実際、大学生達と接していても、アルバイトなどを通じて色々な年長者とコミュニケーションをする機会のある学生の方が、成人にふさわしい態度や発言をする場合が多い。それは結局、私たちそれぞれの意識が、自分固有のものであるように思えても、実は人とのコミュニケーションを通じて共同的に形成されていることに由来する。そのコミュニケーションの機会が乏しかったり、健全でなければ、その人の意識は、人々との共通性を失い、暴走しはじめ、周囲の人々からは時に狂気に支配されているように映ることさえある。また第二に、現在の学校制度は、それまで高度なものから読み書きそろばんなど、多様、雑多に存在した教育機関を総力戦に備えるべく国家的に整理統合したものであるとして19世紀末から生まれており、現在の学校制度に依拠した形で精神的成人の育成をはかるならば、国家を愛する感性を育て、社会に奉仕する無償の活動を実践するなどといった国家主義に傾斜した内容が盛り込まれがちだということもある。

豊かなコミュニケーションの機会を与えてくれ、また社会的な経験を様々に提供してくれる場はどこに求めたらよいのだろうか。近年の議論を踏まえると、それは国家でも市場でもない領域としての市民社会だという考え方もありそうだ。確かに、多様な人々が出会い、言葉を交わす市民社会的空間は、様々なディスコースが交錯する場でもあり、その多様性の中を移り歩く過程で、精神的な成長も獲得できるかもしれない。しかし、近年の市民社会論は、経済的な領域に対する一面的に否定的な評価ががちすぎている。経済的な活動空間は、依然として人々の協働の主要素だといって良い。また、人がその生涯の時間を費して何を実現し、残すことができるのかを考えるならば、経済的な活動を一面的に否定することはできない。

もちろんその場合の経済的な空間は、今の市場社会とそのまみイコールの関係にあるものではない。そうした点で、豊かなモデルを

提供してくれるものとして、18世紀イギリスの文明社会論や道徳科学の世界をあげることができる。まだ労働の疎外が成立せず、また総力戦体制の影も見えないこの時代では、人々の自律的な協働が現実のものとして存在していた。その後、19世紀後半から最近までの150年ほどは、総力戦体制が浸透し、生活も思想も国家を抜きに語ることはできなかったが、昨今のグローバル化の進展で総力戦体制が揺るぎ、それが成立する以前の社会のあり方が異なった相貌を見せ始めているのだ、などというところ、福田先生は、優しい笑顔をたたえながらも厳しい目で、勉強がまだまだ足りないとは叱責されるだろう。

ところで冒頭に触れた、「真理は自由を得さすべし」という書についてだが、書には旧約聖書の一節からと但し書きが添えられている。最初にこの書を手にした時には、このポストモダンの時代にあって、宗教と関わりを持つような真理が、果たしてどのような構造で成立するのだろうか、などと斜に構えた印象をもったものだが、今となると、その印象は少しずつ変化している。絶対的な真理に到達することはあり得ないとしても、様々な知識を持つことは、先入観や偏見からの自由を、少しだけであったとしても、もたらしてくれるのではないかと考えるようになったからである。例えば、家族や宗教についての知識などはその一つの典型だろう。やや個人的な話したが、ある知人は、自分は長男だから結婚相手は自分の親と同居してくれる人でなければならない、と学生時代から語っていた。彼にとっては、男系長子による家の継承ということは疑いを入れないことだったようだ。しかし、結婚した子どもが親と同居するというのは、世界中のどこでも見られることではない。例えばイギリスの場合、一つの屋根の下に二つの夫婦は同居しないのが原則である。イマヌエル・トッドの分類に従えば、ヨーロッパの場合、子どもが結婚後も親と同居するのは、直系家族、共同体家族であり、それ以外

の核家族の場合はそうはならない。また中根千枝によれば、世界的に見ると、長子が親と同居してその老後を見るよりも、末子はその役割を引き受ける方が一般的だという。親がちょうど老齢化して働けなくなる頃に、末子が成人するのだから、この末子相続は合理的な制度なのだと、中根は論じている。日本に目を向けてみても、長男による家の継承が一般化するの、明治以降のことといつてよい。明治以前は、長男が家を継承するというのは、人口のごく一部を占めていたに過ぎない武家固有の家族制度であり、農村や商家では、様々な制度が敷かれていた。このように家族の形態は、世界で多様であり、日本でも歴史的に見れば多様であった。そして今日ではグローバル化の進展で、その多様性は再び増しつつあるように見え、家族の形態は、ある程度は主体的に選び取ることができるものとなっている。先の知人からは、随分と時を経てから結婚したという便りを貰ったが、彼はどれだけ自由な決断ができたのだろうか。

但し、知識がもたらしてくれる自由については、その知識が言葉を介して成立している限り、幾つかの制約があることも、もちろん否定できない。まず、先にも触れたように、体系化された抽象的な観念が陥りやすい実体化ということがある。或いは、私たちの心を日々悩ませている事柄の根源には、私たちが言語を手段として推論を常に働かせてしまうということもある。ホップズの議論を借りれば、人は時間観念と推論能力があるために、現在は満ち足りていても、将来の欠乏に不安を感じ、その不安を今、解消しようと躍起になり、結果として万人の闘争状態に至ってしまう。今の時代なら、私たちは、このままでは資格試験に合格できず望んだ職業に就けないのではないか、このままでは結婚したり、子どもを持つたりすることもできず、孤独な老後を送ることになるのではないかと、このまま売り上げが落ち込むと倒産に追い込まれ、日々の生活もままならなくなるのではないかと、などと考え、不安で暗い気持ちに落ち

込んでしまう。もし人間が時間という観念を持たなければ、こうした不安は抱きようもない。時間という観念を持つことによって人間は、様々に豊かな文明を作り上げてきた一方で、苦しみも得た。そう考えると、人間の苦悩の根源を知恵の実に求めた楽園追放のエピソードは、ある真理を穿っている。

またこのこととも関わって、真理を探究するというと言語的手段にしばしば至上性を与えがちだが、人と人とのコミュニケーションは言葉のみを介して成立しているわけではなく、また人間に与えられた、人と世界との交信手段も言葉だけではないということがある。また、言葉により形成される知識によって、かえって拘束が強まるという皮肉に見舞われることもある。例えば、あるべき高等教育について議論する際、大学という言葉を度々用いれば、大学という名称を冠している組織全てに共通する理念が確固として存在しなければならないという錯覚にしばしば陥ってしまう。ⁱⁱ その結果として、大学の授業はこうあるべきだ、大学の学生はこうでなければならないという制約を立て、自らの考えと行動に拘束を加えてしまう。或いは、映画音楽、歌謡曲といったジャンル分けの言葉を多用するうちに、それらをクラシック音楽の下位に位置するものと決めてかかれれば、それらを楽しむ機会を逸してしまうだろう。言葉による説明を捨て去れば、どんなリズム、旋律の音楽も、その美しさを増すばかりか、世界とのたおやかな融合を感じさせてくれるかもしれない。また絵画や古代の造形の中には、底知れぬ感動をもたらしてくれるものもある。

自由への道は、なかなかの隘路である。福田先生は、緑会雑誌の先の巻頭言に「自戒を込めて」という標題を与え、次のような言葉で締めくくっておられる。「学者の純粹培養で育ったわれわれ教師にとってもそれが全く無縁とは言えぬであろう。」たとえどれほどの地平に到達しても、それで十分ということではなく、絶えざる研鑽が必要であると、先生

ほどの境地に到達した人でも、或いは到達し得た人だからこそ、自戒されていたのかもしれない。そう考えながら、「真理は自由を得さすべし」という福田先生の書を、机に向かいつつ、じっと見上げていると、この仕事を選んだ以上、それでも知恵の実を食べ続けよ、それによってしか苦悩から解放され、自由になる道はない、という声が聞こえてくるようだ。

真理は自由を得さすべし。この言葉は、私にとって生涯に及ぶべき学習の道標となっている。

*i 『緑会雑誌 復刊第十号』、p4～6.

*ii しかし抽象化された言葉には、それ固有の輝きもある。例えば、自由、真理、正義などの言葉にどれほど人々が鼓舞されてきたかを想起すればよい。大学という言葉も、抽象的な一般性を支えてきた何かがあるのかもしれない。長い間人々によって語られてきた抽象的な観念には、何らかの社会的な期待や要請が込められている場合が少なくない。